

セネガルの人名

1 苗字

(1) 各民族に特有の苗字

セネガルでは、以下の表のように、大まかにいって各民族に特有の苗字が存在するため、姓から民族を言い当てることも可能ではあるが、必ずしも確実ではない。

ウォロフ族	Diop ジョップ、Ndiaye ンジャイ、Fall ファル、Thiam チャム、Guèye ゲイ、Seck セック、Mbaye ンバイ※1
プル族	Dia ジャ、Diallo ジャロ、Diao ジャオ、Sow ソウ、Ba バ、Ka カ
トゥクルール族	Kane カン、Ly リイ、Sy シイ、Wone ウオン
セレール族	Diouf ジュフ、Senghor サンゴール、Faye ファイ、Tine テイン、Sarr サール
ジョーラ族	Manga マンガ、Balde バルデ、Dieme ジェメ、Diatta ジャッタ、Coly コリ、Diedhiou ジェジュ、Sagna サニヤ、Sambou サンプ※2
バンバラ族	Traore トラオレ、Keita ケイタ、Kante カンテ、Coulibaly クリバリ

※1 9割方ウォロフ族だがトゥクルール族にも存在する。

※2 よく似ているが「Samb サンプ（「ブ」の発音が異なる）」はレブ族（ダカール半島北部に多い）に固有の苗字。

プル族、セレール族、ジョーラ族などは、苗字で大体民族を言い当てることができるように思われるが、特にウォロフ族においては他民族からの苗字の借用が多いため、ウォロフ族の多い土地では、「Kane カン」だからといってトゥクルール、「Diouf ジュフ」だからといってセレールと言い切ることはできない。シェーク・アント・ジョップの説によると、純粋にウォロフ族だけの苗字と言えるのは、セネガルには掃いて捨ててもまだ有り余るほどの「Diop ジョップ」と「Ndiaye ンジャイ」のみということである。現在のセネガルにあたる地域では古くから民族間の混交が盛んだったとされているが、そのためだろうか。「Cissé シセ」というセネガル全土でありふれた苗字も、もともとセネガルではかなり少数派のソーサー族に起源があるという。ダカールと隣国マリ首都バマコの間には鉄道が開通して以来、沿線のウォロフ族の間でバンバラ系の苗字が増えたなどという話もあるらしい（バンバラ族はセネガルでは少数派だが、マリには多い）。

興味深いケースとしては、セレール族でもともと「Diame ジャム」を名乗っていた一族が、仏の植民地支配下で行政当局に名前を登録しなければならなくなったとき、フランス人には正確に発音してもらいにくい（セネガルの人名をよく知らない外国人であれば、つ

い「ディラム」などと読んでしまうであろう)「ジャム」は色々面倒であろうという理由から、「Thiam チャム」というウォロフ族の典型的な苗字で届出を出したという話を、筆者は子孫のチャムさん御本人から聞いたことがある。やはり、「セレー族でチャムとは珍しいですね」とよく言われるという。チャムさんによると、一族の中には本来の苗字にこだわって「ジャム」を名乗り続けている人もいるという。

また、主にギニアビサウに分布し、セネガルにもごく少数だが生活しているバランテ族やマンジャック族においては、ギニアビサウが早くからポルトガルによって植民地化された影響か、「Correia コレイア」、「Da Silva ダ・シルヴァ」、「Lopez ロペス」などといった純ポルトガル風の苗字を名乗る人々もいる(ただし、セネガルにはカーボヴェルデ系、ギニアビサウ系など、ポルトガル風の姓を持つ人々は元々少なからず存在する)。

(2)「冗談のいところ」関係について

セネガルのみならず、西アフリカ諸国に共通のものとされているが、「冗談のいところ」関係(cousin de plaisanterie)と呼ばれる習慣がある(ウォロフ語では「カル kal」という)。特定の組み合わせの苗字の者同士(あるいは特定の組み合わせの民族出身の者同士)が出会い頭に冗談の罵り合いを演じ合って笑い、親睦を深めるというものである。セネガルでは「Ba バ」と「Diallo ジャロ」同士、「Mbaye ンバイ」、「Cissé シセ」、「Wade ワッド」、「Samb サンプ」同士、「Diop ジョップ」と「Ndiaye ンジャイ」同士などの組み合わせがこれに当たり、彼らは泥棒、怠け者、貧乏人、大飯喰らいなどなど、多種多様な罵り言葉の掛け合いを演じて座を盛り上げる。例えばシセさんが食事に呼ばれた先で同席したのがンバイさんであることが分かたら「こいつはンバイだから米好きで大喰らいだぞ、早く食べないと全部なくなっちゃうぞ」などとまくし立てるだろうし、ンジャイさんがジョップさん宅を訪問したら、「ンジャイがうちに泥棒しに来たぞ、早く金目のものを隠せ」などと囃し立てられるだろう。相手が初対面であっても遠慮する必要はない。もちろん、冗談であることは双方が承知の上であるから、お互いに反論しあって格拉グラ笑っておけばよい。日本人からするとセネガル人の冗談はただでさえどぎついで、びっくりさせられることも多々あるが、席を同じくした者同士の緊張を緩和するためのシステムである¹。

2 個人名

(1)「トゥランドー」の習慣

毎年のように赤ちゃんの名前の人気ランキングが発表される日本と異なり、セネガルの名前には流行り廃りといったものが基本的に存在しない。

¹ なお、民族同士の「冗談のいところ」関係は、セネガルではセレー族とプル族(またはトゥクルール族)の間に存在し、双方が「お前たちは我々の奴隷」と、何とも際どい冗談を飛ばし合うことで知られている。

セネガルの個人名は、原則として誰かから受け継ぐものである。赤ん坊に名前を付けるのは父親の仕事と決まっているが、父親は自分の両親や祖父母、その他の親族、あるいは妻の親族や、親しい友人、尊敬する人や恩を受けた人、自分の帰依するマラブー（宗教指導者）などから名前をもらって子どもに付ける（サル現大統領の「Macky マッキー」という名は、父親を警備員として取り立ててくれた上司の名であるという。あまり見かけない名前である）。こうして自分と同じ名前となった人のことを互いに「トゥランドー-turandoo（名前を共有する人）」といい、陰日向に助け合う特別な関係となる。その他、単に偶然同じ名前である人のことをトゥランドーと呼ぶこともあり、名前を名乗ると「ああ、君は私のトゥランドーだ」とか、「うちの母が君のトゥランドーだよ」などといった返事が返ってくることは珍しくない。「冗談のいところ」関係もそうだが、何かあったときに頼りにできる特別な関係を、少しでも多くの人との間に築くためのシステムが至る所に組み込まれているのがセネガルの社会である。

（2）生後7日目の「おばあちゃん」

赤ん坊の父親が、自分の母親（赤ん坊にとっては祖母）から「Khady ハディ」という名前をもらって娘に付けたとしよう。この場合、「いかに娘であっても、自分の母親の名前を呼び捨てにするわけにはいかない」という考え方から、この赤ん坊はウォロフ語を話す家庭であれば、父親のみならず周りの皆から「Ndeye Khady ンデイ・ハディ（ハディ母さん）」と呼ばれることになる（実際の発音は「ンデイ」と「ンダイ」の中間くらい）。あくまでも基準点は名前を付ける父親であり、赤ん坊にとっておばあちゃんだからといって、「ハディおばあちゃん」とは言わない。そのうちにハディが省略されてしまい、赤ん坊が単に「母さん」とだけ呼ばれるという、日本人にはやや珍妙に思える事態も非常に一般的であるが、ともあれ、セネガルにンデイで始まる名前の女性がごまんといっているのはこういうわけである。ウォロフ語で「母さん」を意味する言葉には他に「Yaye ヤーイ」もあるから、この子は「ヤーイ・ハディ」と呼ばれることになるかもしれないし、プラール語家庭であれば「Nénné Khady ネネ・ハディ」と呼ばれるかもしれない。「Mama Khady ママ・ハディ」というややハイカラな呼び方もある。この子の出生届に記載される正式な名前は、「ンデイ・ハディ」になるかもしれないし、「ハディ」だけを届け出て「ンデイ」は非公式の呼び名にとどめる場合もある。

名前をもらったのが父親の父親（赤ん坊の祖父）であれば、例えばその名前が「Dame ダム」なら「Pape (Papa) Dame パプ（パパ）・ダム」もしくは「Baye Dame バイー・ダム」となる。祖父母を指す言葉は男女の別なく「Mame マム」であるから、父親の祖父母（赤ん坊の曾祖父母）がトゥランドーであった場合、赤ん坊は生後弱冠7日目にして（赤ん坊の命名式は生後7日目に行われる）、「Mame Anta アンタおばあちゃん」、「Mame Cheikh シェイクおじいちゃん」などと呼ばれることになる。

赤ん坊の名前は親族や友人だけでなく、歴史上の偉人から取られることもあるが、その

代表例が、これもmamで始まる「Mame Diarra mam・ジャーラ」であろう。mam・ジャーラ・ブソは、セネガル四大イスラム教団の一つであるムリッド教団の開祖アーマド・バンバ・ンバケの母親で、非常な良妻賢母であったと伝えられる。ムリッド教徒であれば、非の打ちどころのない美しい名前であると考えられることだろう²。恐らく元祖mam・ジャーラは曾祖母のジャーラがトゥランドーであったために「mam」・ジャーラと呼ばれたのだろうが、現在ではmamとジャーラで完全に1セットの名前として扱われており、別に曾祖母の名がジャーラでも何でもなくとも、mam・ジャーラ女史から名前をもらった赤ん坊はmam・ジャーラと呼ばれる。

(3) 宗教、伝統と個人名

セネガル人の個人名は、イスラム名、クリスチャン名、セネガル起源の伝統的な名前の三つに大別することができる。

ただし、セネガル人は総じて宗教については大らかで、一つの家族の中にイスラム教徒とキリスト教徒が共存していることもあるし、イスラム教徒の父親がキリスト教徒の友人から名前をもらって子どもにつけることも珍しくない。そのため、イスラム教徒が「Marie マリ」という名前であったり、イスラム名の後にクリスチャン名のミドルネームがついてくることも多々ある。

イスラム名

イスラム名の代表的なものには、男性名であれば預言者の名である「Mohamed モハメッド」を頂点に、アラビア語で「～の下僕」を意味する「Abdou アブドゥ」、同じく「賞賛に値する者」を意味する「Ahmed アーメッド」などが挙げられる。女性名には、預言者の最初の妻ハディースに由来する「Khady ハディ」、同じく最愛の妻とされるアイシャに由来する「Aïcha アイシャ」、同じく娘のファティマに由来する「Fatimata ファティマタ」、同じく母のアーミナに由来する「Aminata アミナタ」などがある。

上に記したような非常にポピュラーな名前には数え切れないほどの派生形が存在し、「ファティマタ」の変形には「Fatou ファトゥ」、「Fatima ファティマ」、「Fama ファーマ」、「Faty ファティ」など、「アブドゥ」のバリエーションとしては「Abou アブ」や「Abdoul アブドゥル」、またはアブドゥに「Allah 神」を足して「神の下僕」を意味する「Abdallah アブダラー」、さらにそれをセネガル風に発音した「Abdoulaye アブドゥライ」、「Aboulaye アブライ」など、枚挙に暇がない。著名人にも「アブドゥ」から派生した名を持つ人物は多く、ジュフ第2代大統領の名が「アブドゥ」、ウッド前大統領が「アブドゥライ」、ジョヌ現首相は「Mahammed bun Aboudallah マハメッド・ブン・アブダラー」と、アラブ色の強い

² セネガル人が見知らぬ女性を呼び止めるときなど、普通は「そこの奥さん」、「そこのお姉さん」とでも言うだろうが、当てずっぽうで「mam・ジャーラ!」と呼びかけてくる人にも比較的頻繁に遭遇する（恐らくムリッド教徒であろう）。彼らなりの敬意を含んだ呼び方と言えないこともない。

名前である（「ブン」はアラビア語で「～の息子」を意味するが、セネガルではほとんど用いられない）。

「El Hadj エラジ（女性形は「Adja アジャ）」という名は元来メッカ巡礼を果たした者の名に冠する尊称だが（ママドゥ・ジョップさんが巡礼を果たしたら、エラジ・ママドゥ・ジョップさんと呼ばれるようになる）、尊称ではなく普通の個人名として用いられることもある。トゥランドー関係を遡ればメッカ帰りのエラジ某さんに行き着くのかもかもしれないが、彼にあやかっただけで巡礼経験のないエラジさんも多数存在する。

イスラムにおいては、聖書もまたアッラーが下された預言の書と考えられるため、新旧の聖書の登場人物に由来する名も多い。「イエス」のセネガル読みは「Issa イサ」、「マリア」は「Marième マリエム」である。その他、大天使ガブリエルに由来する「Djibril ジブリル」、箱舟で洪水をしのいだノアに由来する「Nouah ヌア」、聖母マリアの父親などのヨセフに由来する「Youssef ユスフ（世界的に有名な歌手ユッサー・ンドゥールの「Youssef ユッサー」はその派生形）」なども聖書由来の人名である。また、隣国であるガンビアのジャメ大統領の個人名は「Yahya ヤヤ」だが、これはイエスに洗礼を施したヨハネから来ている。

クリスチャン名

クリスチャンネームについては、男性なら「Albert アルベール」、「Paul ポール」、「André アンドレ」、「Pierre ピエール」など、女性なら「Marie マリ」、「Elisabeth エリザベート」、「Rose ローズ」、「Antoinette アントワネット」など、大部分がフランス式の名前である。トゥランドーの習慣はキリスト教徒にも共通のものであるため当然だが、日本と同様に新しい名前が次々登場するフランスなどと比べ、随分と古風な名前がいまだに現役という印象である。

セネガル起源の伝統的な名前

それらに加え、イスラムやキリスト教の普及以前から存在したであろう伝統的な名前がある。男性名なら「Allé アレ」、「Gora ゴラ」、「Ndiaga ンジャガ」、「Gorgui ゴルギ³」など、女性名なら「Fanta ファンタ」、「Coumba クンバ」、「Penda ペンダ」、「Maty マティ」などがある。女性の名前は伝統的なものがそここの割合を占めているのに対し、男性名はイスラム由来のもの（あるいはクリスチャンネーム）が主流で、伝統名の占める割合は1割にも満たないという印象である。

各民族に固有の個人名も存在し、例えば「Gnilane ニラン」や「Ndélla ンデラ」という女性ならセレール族と推測できるし、「Yéro イェロ」という男性ならブル族と分かる。サンゴール初代大統領のフルネームは「Léopold Sédar Senghor レオポルド・セダール・サンゴ

³ 「ゴルギ」という名はウォロフ語の「ゴル・ギ gor gui（直訳すると「その男」）」から来ているのだろうが、この言葉は「親父さん」「爺さん」といったニュアンスで、親しみと尊敬を込めて年配の男性を指す代名詞としても使われる。百戦錬磨の古強者としていまだ政界に君臨するワッド前大統領の渾名がまさに「ゴル・ギ」である。

ール」だが、フランスで教育を受けた親仏家の同大統領のことでもあり、レオポルドは容易にクリスチャン・ネームであると知れる。セダールもサンゴールも、響きといい字面といい何となく西洋的な感じがするが、意外なことにどちらもセレール族に固有の個人名及び姓である⁴。プル族においてはとりわけ特徴的な名前が多く、特に女性名として、「Altiné アルティネ（月曜日）」、「Allalba アラルバ（水曜日）」、「Adiouma アジュマ（金曜日）」など、生まれた曜日をそのまま名前にすることもある⁵（曜日に基づいた名付けの習慣はアフリカ各地に広く見られるようだ）。

赤ん坊にあまり華々しい名前をつけると悪魔や悪い聖霊に連れ去られ、早死にしてしまうという考えから、わざと嫌な意味合いの名前を付けるという習慣は世界各地に見られ、セネガルも例外ではない。ウォロフ語で「ぼろ切れ」を意味する「Sagar サガル」、「(米や豆を蓄えておく)袋」の意味の「Sak サク（恐らく伝語の sac (袋) に由来する語であろう）」などはまだ可愛い方で、「Doufiyendou ドゥフィイエンドゥ（この人は日中ここに滞在しない）」、「Doufifanaan ドゥフィファナーン（この人はここに泊まらない）」、果ては「Beugouma ブグマ（好きじゃない、いらぬ）」、「Kenbeugoul ケンブグル（誰にも好かれない、欲しがられない）」といった、悪魔も裸足で逃げ出しそうな名前も存在する。ただし、あまりに気の毒な名前であるからか、本当に至極稀にしか遭遇しないという。有名どころでは「Ken Beugoul ケン・ブグル」という女流作家が活躍しているが、ファーストネームが「ケン（誰も）」で苗字が「ブグル（欲しがらない）」となると、流石にペンネームであると分かる。彼女の本名は、「Mariétou Mbaye マリエトゥ・ンバイ」という、凄まじいペンネームに比してごく穏やかなものであるようだ。

（４）あだ名

セネガルには、普段呼ばれている名前と身分証に載っている本名が一致しない人が結構いるものである。上述の「ンデイ」もそれに当たるし（「ンデイ」が身分証に記載されない通称である場合）、本名を「Mohamed モハメッド」という人がモハメッドの派生形である「Mamadou ママドゥ」や「Modou モドゥ」、「Fatimata ファティマタ」という人がその変形である「Fatou ファトゥ」と呼ばれることもあるし⁶、また、どういうわけか、女性名

⁴ ただし、セネガルにおいては、大統領など重要な地位にある政治家は決して自分の出身民族を公言しないという暗黙のルールが徹底されており、サンゴールがセレール人であることは誰もが知るところではあったが、彼が公の場でセレール人を名乗ったりセレール語で話したりすることは全くなかったという（大統領が出身民族に言及しないというルールは今でも守られているが、一般市民により通用しやすい現地語のテレビ・ラジオ放送が普及し、政治家が式典でウォロフ語のスピーチを行うことなども当たり前になったためか、ウォロフ人とされるワッド前大統領がウォロフ語で喋ったり、トゥクルール人とされるサル現大統領がプラール語話者の多い地域を訪れた際にプラール語で演説したりすることは、特に問題視されていないようだ）。

⁵ プル族の名付けに関しては、小川了『サヘルに暮らす—西アフリカ・フルベ民族誌』（1987年、日本放送出版協会）に詳しい。

⁶ ちなみに、この「モドゥ」と「ファトゥ」は、セネガルに名前の人気ランキングがあったら恐らく双方ともかなり上位に入るのであろう名前である。日本でいう「太郎」と「花子」のようなも

「Rokhaya ロカヤ」の派生形というか別称は、元のロカヤと似ても似つかない「Daba ダバ」であるという。筆者の友人には、身分証に記載された本名を「ロカヤ」というが、トゥランドーが父方の祖母であるために、家族からは「ンデイ・ロカヤ」を略して「ンデイ」と呼ばれ、友人たちからは「ダバ」と呼ばれている人がいる。本名と全く関係のないあだ名で呼ばれる人も多く、これまた筆者の友人だが、名前を貰ったトゥランドーが早々に亡くなってしまったため、縁起が悪いとしてそれ以来本名で呼ばれることはなく、あだ名で通している人もいる。あだ名の方も誰かから貰った名前だという。

(5) 双子の名付け

イスラム教徒の家庭に生まれた赤ん坊が双子である場合、両方とも男の子であれば「Allassane アラッサン (アッサン、アルサンなどの変形あり)」と「Housseinou ウセイヌ (サダム・フセイン、オバマ米大統領のミドルネーム等に見られる「フセイン」のセネガル読み)、両方とも女の子であれば「Adama アダマ」と「Awa アワ」、もしくは男女の双子であった場合にも「アダマ (男)」と「アワ (女)」と名付ける習慣がある (アダマは男女どちらにも付けられる名前)。このアダマとアワは、旧約聖書に登場する「アダム」と「イヴ」のセネガル読みである⁷。もちろん、この習慣にこだわらず、好きな名前を双子につけるのも親の自由である。

3 付記：ガンビアの人名

セネガルの隣国であり、わずかな海岸線を除いて領土をぐるりとセネガルに取り囲まれたガンビアは、民族構成、言語、文化など多くのものをセネガルと共有しており、「最もセネガルらしいセネガル、古き良きセネガルはもはやガンビアにしか残っていない」とまで言う人もいる。セネガルとガンビアは、もちろん人名に関しても多くを共有しているが、ガンビアにおいては、セネガルにも存在する人名が英語風の独特のスペリングで表記されている点が興味深い。例えば大統領の苗字「Jammeh ジャメ」は、セネガルでは「Diamé」と表記されるであろうし、副大統領の個人名「Isatu アイサトゥ」はセネガルでは普

のだろうか、一般に、ヨーロッパに出稼ぎに行くセネガル人男性を総称して「モドゥ・モドゥ」、女性の場合は「ファトゥ・ファトゥ」と言う。なお、見知らぬ女性を呼び止める際の当てずっぽうの名前としては、上述の「ママ・ジャーラ」の他にも、この「ファトゥ」にセネガルで恐らく最も多い苗字であろう「ンジャイ」を組み合わせた「ファトゥ・ンジャイ」もよく聞かれる (実際には音が詰まって「ファンジャイ！」と聞こえる)。

⁷ 去年はエボラ出血熱対策の陣頭指揮に大忙しであった現保健大臣の名は「Awa (Eva) Marie Coll Seck アワ (エヴァ)・マリ・コル・セック」だが、彼女の名前は新聞等でも、また行政文書においてさえ、「アワ」であったり「エヴァ」であったり一定しない。「エヴァ」も「アワ」同様「イヴ」の別称であるから、周囲も、もしかすると本人も「どちらでも可」とあまり頓着していないのかもしれない (この場合、例えば父親がイスラム教徒で母親がキリスト教徒といったケースが考えられるとのこと。父方の親族には「アワ」と呼ばれ、母方の親族には「エヴァ」と呼ばれてもなんら不自然ではないという)。

通「Aïssatou」と表記される。セネガルで一般的な苗字「Cissé シセ」は、ガンビアでは「Ceessay」、「Ndiaye ンジャイ」は「Njie」、「Diallo ジャロ」は「Jallow」といったところである。韓国でも、「朴パク」姓の人々が海外でも分かりやすいようにアルファベットで苗字を「Park」と表記したり、また潘基文国連事務総長の名前が「Ban Ki-moon」と表記されるなど、英語風のスペリングが普及しているが、これを連想させる習慣である。

参考文献

Diouf, Makhtar, Sénégal, les ethnies et la nation, UNRISD, Paris, 1994.

小川了『サヘルに暮らす—西アフリカ・フルベ民族誌』1987年、日本放送出版協会

参考サイト

http://www.senegalaisement.com/senegal/noms_et_prenoms.html